

「笑い」をテーマにした哲学の授業の展開～「哲学通信」を中心に～

A Class of Philosophy on the Theme of “Laughter”  
～Focusing the Attention on “Philosophical Correspondence”～

大谷 孝行  
OTANI Takayuki

抄 録

筆者が担当している哲学の授業では、「笑い」を主たるテーマとして計3回の授業を行っている。「よりよく生きる」ことについて考える哲学において、人生の質を高める笑いを考察することは決して無意味なことではない。

授業が教員からの一方的な講義に終わらないように、筆者は毎回の授業内容に関連したテーマを課題として受講生に与え意見を書いてもらい、その全文章を「哲学通信」として受講生全員に配付し、学生たちの考えを相互に紹介する機会を設けている。(1)

笑いに関する3回の「哲学通信」のテーマは、人生に笑いが必要な理由、富山県民のノリ、ユーモアのある人の特質、に関してである。筆者の授業に対する学生の授業評価アンケート結果では、「哲学通信」によって授業内容の理解が深まり、自分の考えを再確認できたと回答している受講生の多いことがわかった。

キーワード

哲学、笑い、哲学通信、ユーモア

はじめに

現在日本では、笑いは実に様々な領域から研究が進められている。日本笑い学会の発表を見れば、発表者の多彩な顔ぶれに気づくだろう。笑いが健康面に及ぼす効果を検証する医学の立場からの報告、文献に記された笑いに関する表現を分析する文学的立場の研究、笑いを教育の場で活用しようとする教育現場からの報告、笑いを町起こしに活用しようとする各種団体の人々等。当学会の特色は、会場に笑い声が絶えず、活気にあふれていることである。色々な分野の人々が集まって研究成果を発表することには、人が笑いに引付けられる事実が端的に現れている。

笑いについては古来、哲学者たちも発言してきた。人間は様々な場面で様々な笑うので、笑いを考察することは人間の特質を知る手がかりになると考えてのことであろう。

筆者もそうした笑いの魅力に引かれ、笑いの研究に従事し、哲学の授業でも笑いを取り上げている。この授業を通じて学内が少しでも活性化し、学生たちが笑いの意義を再認識し、人生の質を高めてもらいたいと考えている。

本稿は、筆者が担当している大学の哲学の授業で、笑いをテーマにどのような授業運営をしているかを報告するものである。その際、筆者が平成 26 年度から導入している「哲学通信」とい

う試みについても紹介する。

## 1. 「笑い」と哲学

筆者は大学の授業で「哲学の基礎」という科目を担当している。この授業は主として1年生を対象にした教養科目（選択科目）に属し、計15回、2単位の授業である。受講生数は毎年70～100名ほど。シラバスにおいては授業目標を3つ掲げており、「筋道立てて考える習慣をつける」、「なぜ～か、～とは何かという疑問を大切にする」、「自分の考えを自分に明らかにする」ことを到達目標としている。授業を通じて習得を目指す力は、人としての能力、人間性の向上である。

初回の授業はガイダンスとして位置づけ、哲学とはどのような学問かを中心に解説し、さらには全15回の内容を俯瞰した説明のほか、課題の提出方法や成績評価の方法について伝える。その際には以下に述べる「哲学通信」についての注意事項も説明する。

当該授業では、毎回学生たちは授業に関わるテーマについて150字程度で自分の考えをまとめ、筆者にメールで送付することとしている。送られた全ての文章は「哲学通信」としてまとめられ、次回の授業で名前を伏せて受講生全員に配付する。そして深く考えている文章、考え方がユニークと思われる文章をいくつか筆者が選択し、授業開始時に学生に朗読してもらうという方法をとっている。

初回の授業では、哲学の特徴の一つとして、哲学は「よりよく生きる」ことを考える学問であることを伝える。(2) よりよい生き方について考えることは全授業の内容を貫く通奏音のようなものであり、受講生にとって毎回の授業は、何らかのかたちで現在の自分の生き方を見つめ直す内容になっている。

笑いを哲学の授業で扱う主たる理由は、笑いを考察することが人間の特質を理解することにつながるため笑いについて言及してきた哲学者が多いこと、笑いは「人生・生活・生命の質」(QOL)を高め、「よりよく生きる」ことに多大な貢献をすることによる。

笑いがQOLを高めるために不可欠であることは、笑いのない人生がどのようなものかを考えてみれば明らかであろう。笑いがない人生は暗くて重苦しく、身体的、心理的、社会的に好ましい影響を人間に与えないことは容易に想像できる。筆者の笑い研究の動機もメンタルヘルスの維持に端を発しており、特に笑いが心理的な「とらわれ」の克服面においても有効ではないかということと関わっている。人生の困難な局面に遭遇した時、真面目な考え方だけではそうした局面を乗り切ることができない場合もあるだろう。ある種の楽観性や心の余裕、自分を突き放してみるユーモアのある態度が必要な場合が必ずあるはずである。例えば定型的な考え方しかできずに苦しんでいる人、強迫観念で苦しんでいる人にとって、ユーモアは大切な生き方の方向性を与えてくれる。ユーモアの力として「われわれは、通いなれた注意と思考の精神的経路を進むかわりに、新しい道に切り替え、それまで注意をむけることのなかった事物に注意をむけ、多くの可能性さらには不条理性を、実際の事実とおなじように苦もなく認める」(3) ことが挙げられる。

現代では、笑いが心理的な健康面ばかりでなく、身体的な健康にもよいことは、ほぼ常識となりつつある。笑いは様々な面において人間が「よりよく生きる」ために不可欠なのである。

## 2. 講義内容の概略

筆者が担当する哲学の授業の全 15 回のうち、笑いを主たるテーマとして取り上げるのは計 3 回であり、その内容の概略を紹介すると以下のようなものである。

第 1 回目では「人はなぜ笑うのか」をテーマとし、笑いの構造について哲学者の有名な理論を挙げて説明する。(4)

古来笑いの理論のなかで有名な「優越の理論」として、プラトン、アリストテレス、ホッブスの考えを紹介する。他人の愚かさに対して自分が優越感を感じて笑うというのがこの理論の特徴である。授業を通じて筆者は笑いの素晴らしさを喧伝するのだが、一方で笑いははらむ危険性についても言及する。また、この理論に関係して、かつてわが国のバラエティー番組で活躍したおバカタレントにも触れる。

次に、笑いの理論で有名な「ズレの理論」の代表として、パスカル、カントの考えを紹介する。パスカルは予期したことと現実にかかることとのズレ、不釣り合いにより笑いが起こると述べ、カントは緊張した予期が裏切られるところに生ずる情緒としての笑いについて述べている。

鬱積したエネルギーの発散、抑圧からの解放としての笑いについては、ハーバート・スペンサーとフロイトの考えを紹介する。日常のストレスや理性による抑圧からの解放として笑いが生まれると考えるこの理論は、ストレス社会、コントロール社会と言われる現代日本の社会の中で、笑いに親しむ意義を再考させてくれる理論でもある。理性的抑圧からの解放という点は、人はなぜ下ネタで笑うのかにも関わる問題である。

現今の日本において、日々のテレビ番組で活躍するお笑い芸人たちは、本人が意識してかどうかはさておき、上記の理論に沿ったようなネタや番組内容を構成している。そこで授業においては、お笑い芸人の芸を視聴し、その芸を上記の理論から分析することも行っている。

笑いに関する第 2 回目の授業では日本人の笑いについて考察する。(5) 内輪では冗談を言って盛り上がるが、公の場になるとジョークなどを言わなくなる日本人にはユーモアのセンスがないのか、外国人から見て奇異に映る日本人の笑いとは何か、日本の中でも特徴的な大阪の笑いとは何かについて解説する。(6)

相手に対する謙遜や気遣いから生まれる日本人の笑顔については、ラフカディオ・ハーンの商品の一節から、こうした日本人特有の微笑を紹介する。このような笑顔をよしとする日本人の心性は、ハーンが指摘した明治時代という過去の特色とばかりは決して言えないだろう。それは、おもてなしに代表される気遣いを重んじ、客に対して常に心を砕き笑顔を絶やさない現代の日本のサービス精神につながっていることを指摘する。

第 3 回は「ユーモア」について考える授業である。ユーモアはウィットやエスプリとどう違うのか、ユーモアは人格や人間性に関係があるのか、ユーモア精神で生きるとはどのような生き方かを、この回の授業では考える。困難の多い人生において、ユーモア精神がなぜ大切なのかを考える回でもあり、「よりよく生きる」ことを考える哲学の特徴からも、ユーモアについて考察することは有意義である。

筆者がユーモアに関して強調するのは、厳しい局面に遭遇した時の人生観、人間観として生きてくるユーモア精神である。ドイツで最も有名なユーモアの定義とは、「ユーモアとは『にもかかわらず』笑うこと」と言う。(7) また、英文学者の矢野峰人によれば、「ユーモアは、人生の馬鹿らしさ、おかしさに直面しながら、これを憎む事の出来ない場合に生ずる心状である。そ

れは、人生の馬鹿らしさを馬鹿らしく感じない事でもなく、不合理を不合理と感じない事でもない。唯、それを、濫りに責めず憎まず、一種憐憫の情をさえ籠めて眺める心である。」(8)

人を皮肉ったり貶めて笑うのではなく、人に対する温かな思いやりから生まれる笑いがユーモアであり、「ユーモアとは人を救う笑い」であることを解説する。(9)

### 3. 「哲学通信」

筆者は平成 26 年度の授業から「哲学通信」と称して、受講生に毎回授業に関連したテーマで自分の意見を 150 字程度でまとめ提出してもらっている。筆者にメールで送付された文章は、すべて名前を伏せて印刷したものを次回授業の開始時に受講生全員に配付し、毎回いくつかの文章を学生に朗読してもらうことにより受講生が他の学生に学ぶ機会としている。

ここでは、「哲学通信」の一部を紹介し、受講生の考える姿勢の一端を示したい。なお、以下に挙げる「哲学通信」の文章は、平成 28 年 11 月 2 日、11 月 9 日、11 月 16 日に開講された授業の課題として提出され、それぞれ 1 週間後の授業開始時に配付された「哲学通信」からの抜粋である。(10)

#### 3-1. 笑いはなぜ必要か

笑いの授業第 1 回目では「人生に笑いはなぜ必要か」というテーマを課題として与え、哲学の特徴である「なぜ」という疑問を大切に作る姿勢から、笑いについて考えてもらった。

精神面や肉体面で人が病に陥らないための安全弁としての役割を笑いが果たしている点を取り上げたのが、以下の文章である。

「人生に笑いが無いと、常に固い緊張状態になってしまうと思う。ずっと気を張っていると、とても疲れる。また、笑わないと心が病にかかってしまうと思う。友達と馬鹿なことをして笑っている時間はとても楽しく、辛いことがあったとしてもそのときだけは忘れられる。健康に生きるためには笑うことは大切だと思う。」

「私は笑いは人生の息抜きだと考える。人生には多くの出来事があり、楽しいことや苛立ち、悲しいことなどといったことが突然起こる。そのような時にずっと気を張りつめていると肉体的にも精神的にも疲労が溜まるだけだと思う。今回の講義の放出の理論に似ているが、束縛や抑圧で溜めておいたエネルギーはどこかで上限がきてしまうかもしれない。すると、風船のように破裂してしまうかもしれない。その破裂は肉体や精神に支障をきたす恐れがあるからだ。そのため笑いで力を抜くことが必要だと思う。」

「人は生きる上でありきたりな日常にうんざりしていたり、何かに悩んでいたりとストレスを抱え込んでしまっている。ストレス解消の方法には色々あるが、スペンサーが言うように、笑うことはエネルギーの発散である。我慢していたものを解放し、心の回復に役立つから、自分の人生に付いてくるストレスを取り除くのに笑いは不可欠なものであると思う。」

人は社会的に他者とコミュニケーションをとりながら生きる存在であり、コミュニケーションを円滑にする潤滑油としての笑いの側面にふれたのが以下の文章である。

「人生にとって笑いとは人との繋がりを作ることであり、自分の人生を楽しく生きるものだと思ふ。人と接するときにはイライラしてたら相手も気分が悪くなるが、笑顔で接する

と一緒に笑えて繋がりが作れる。またずっとイライラしてたり落ち込んでたらつまらない人生になるので、人生は笑ったもん勝ちだと思う。」

「何か面白いことで笑うと周りもつられて笑ってしまう。誰かが笑うと笑顔と面白さを共有できる。また、あまり知らない人と談笑すると親近感が湧いて仲良くなった気になる。笑いは周りを巻き込んで人と人との暖かい雰囲気を作り出す力があると思う。」

笑うことは人生の質を高め、人生を豊かで意味あるものにするのに不可欠である。そして笑うことそれ自体が楽しさ、幸福感、生の充実感の表現であるからこそ、笑いが人生に必要なとする意見が以下である。

「私は、笑いは人生を楽しむために必要だと思う。ウィリアム・ジェイムズの言葉と同じく、面白い人生だから笑うのではなく、笑うから面白い人生になると思うからである。笑い無しで人生を楽しむことは不可能であり、やがて生き甲斐も無くなるだろう。」

「人生とは辛いことばかりである。辛いことを忘れるためや乗り越えるために笑いがあると思う。私も学校やバイトなどで嫌なことや辛いことがあったら、家でお笑い番組を見たりして忘れようとしている。また友達と話していて笑いが起きるときがある。私はそのときが幸せと感じる。よって私にとって笑いとは幸せなものであり、なくてはならないものである。」

「笑いは人生を楽しむために必要だと思う。思い返してみても友達と遊んだ時、話している時、旅行に行った時などは楽しいと感じる。それはたくさん笑っていたからだと思う。笑うからこそ楽しく、楽しいからこそ笑うのだと私は考える。また、笑い合い楽しかったからこそもう一度やりたいという思いになり人生も華やかになると思う。」

笑いの理論などを根拠として笑うことに対する理由づけは色々できるだろうが、笑うことは人間にとって自明であり当たり前だという考えもあったので紹介しよう。

「なぜ人生に笑いは必要かと考えた時に、人間から笑いをとってしまったらロボットや動物と変わらないのではないかと思います。人間として当たり前のように生きるには笑いではなくてはならないもので、幸せを表現する上で分かりやすい方法だと思います。充実した人生を送っている人は必ず笑いが絶えない環境で生きていると思いました。」

哲学では、普段自明視していた事柄に対して、「なぜ？」と問いかける姿勢を大切にする。受講生にとって日頃笑うことは当たり前であり自明の事実であろうが、あえて「なぜ笑うか？」と疑問を投げかけることにより、人生における笑いの意義を再考してもらっている。

### 3-2. 富山県民とノリ

笑いの授業第2回目の「哲学通信」のテーマは、「富山県民はノリがよくないと思うか」である。このテーマを設定した理由は、当該授業回において日本の中で特徴的な存在を示す大阪の笑いについて紹介し、大阪の人々のノリの良さや「ノリ・突っ込み」と言われる笑いのパターンなどを解説することが関係している。特に真面目、勤勉、慎重という県民性が特徴とされる富山県民のノリはどうかにかについて考える「哲学通信」である。ちなみに本学の学生は、地元である富山県出身者が8割以上を占めており、「富山県民はノリがよくないと思うか」というテーマは、富山県出身者にとって自分を省みることに繋がる。

真面目であることは美德だとしても、真面目すぎて人生を楽しむことがなくなるのは寂しい。

ノリというのは、その場の状況を受け入れて自らも楽しむという姿勢であるので、ノリの善し悪しは、人生を楽しもうとする意識と関連するのではないかと考えられることも、こうしたテーマを設定した理由である。

まず、富山県民のノリは良くないと考える学生たちの意見を紹介する。なお、授業の中では学生たちに、「ノリ・突っ込み」をする大阪の一般市民たちを取り上げたテレビ番組を見てもらっている。

「富山県民のノリは全国でもとても良くない方だと思います。大学で県外の高校出身の方が何人かおられますがその方たちはノリがすごくいいですし、彼らは富山県民のノリは面白くないと言っておられました。確かに富山県民は恥ずかしがったり、周りを気にしすぎていたりするところがあってノリが悪いんじゃないかと私も思います。」

「私は富山県民はノリが良くないと思う。私は県外から来たが、真面目というよりも、引っ込み思案のように思えた。『こういう風に言ったら恥ずかしいな』みたいな考えがあるのだと思う。私は、別に恥ずかしくても気にすることはないと思う。誰しも、様々な失敗を通して人格や性格が成長すると思っているからだ。」

「富山県民はシャイな人やミーハーな人が多いと思います。地元での大きなイベントや祭りがあったとき、周りの皆が盛り上がっていればノルし、静かであれば大きな声をあげないなどと、周りに合わせる傾向が強いです。それは、目立ちたがり屋や盛り上げ役の人が少ないからだだと思います。ノリたいけど周りが静かだから止めておこうという思いが上回り、ノレないのだと思います。」

「私は富山県民はノリがよくないと思っています。はじめて富山に来たとき、印象は静かです。人が少なく、音があまり聞こえません。富山の人は積極的にあいさつすることがありません。時々、クラスメートに冗談などを話しました。でも、軽く答えただけで、続きません。あと私も何を話すがわかりません、気分が気まずいです。ですから、富山県民はノリがよくないと思っています。」（留学生）

一方で、富山県民のノリは決して悪くないと考えている学生たちの意見もある。

「富山県民はノリがよくないか、という問いに対して、私はそんなことはないと思います。確かに統計的に見れば自分を主張するのがニガテな人が多いと感じます。しかしそれは他人に対しての礼儀を重んじる精神が強いと解釈することができます。また、富山の人は親しい間柄の人とは気軽にノリよく接していると思います。」

「私は富山県民はノリがいいと考える。友達の中でもノリツッコミをしてくれる友達やノリの良い人は結構いる。しかし、富山の人は真面目な人が多く、時と場をわきまえて行動する人が多いため人前ではノリの良いところを見せない人が多いと思う。家族内や親しい友達の間ではやっていることも人前では周りの人に合わせたり、恥ずかしさによってノリの良いところをあまり外に見せなかったりするためノリが悪いように見えるだけだと考える。」

「富山県民はノリがよくないわけではないと私は思う。ただ急に何かを強要されると戸惑いや恥ずかしさですぐに乗ることができないのではないかなと思う。その点大阪府民はどの場面でもすぐに乗ることができるので、そういった羞恥心を持っていないところを私たち富山県民も見習わなくてはならないのではないかなと思う。」

平成28年度の授業では、「富山県民はノリがよくないと思うか」というテーマで計64人の学生が「哲学通信」を提出し、このうち「ノリがよくないと思う」が40人で全体の63%、「ノリがよくないとは思わない」が11人（17%）、「どちらでもない、あるいはわからない」が13人（20%）であった。

参考までに平成27年度の授業では、「ノリがよくないと思う」が59人中35人（59%）、「ノリがよくないとは思わない」が10人（17%）、「どちらでもない、あるいはわからない」が14人（24%）であった。

さらに平成26年度の授業では、「ノリがよくないと思う」が84人中55人（65%）、「ノリがよくないとは思わない」が10人（12%）、「どちらでもない、あるいはわからない」が19人（23%）であった。

以上のように、筆者の授業を受講している本学の学生たちにおいては、「富山県民はノリがよくない」と思っている者の比率は毎年6割前後と高いことがわかる。その主たる理由は、授業中に、日本の中でも特にノリのよい大阪の人々が「ノリ・突っ込み」をする映像を見て、それとの比較において自分や周りの人々のことを考えているからだろう。大阪と比較すればどこの県民もノリが悪いということになりかねないので、上記の「ノリが悪い」とする数値はやや割り引いて考える必要があるかもしれない。

また、筆者が別の機会に別の対象者に行った同じ質問項目のアンケート結果によると、10代の若者（主として高校生）では「富山県民はノリがよくないと思う」が39人で全体の35%、「ノリがよくないとは思わない」が70人で全体の62%であるのに対し、20代以上になると「ノリがよくないと思う」が55%前後、「ノリがよくないとは思わない」が30~40%という結果となり、高校生と20代以上とでは回答比率が逆転していた。(11)

富山県の高校生たちは、決して富山県民をノリが悪いとは考えていない。富山県民を他県民と比較する機会が少ないことや、自分自身が日頃よく笑うと考えていることがこうした結果につながっていると考えられる。

### 3-3. ユーモア精神

笑いの授業の第3回目では、「ユーモアのある人とはどのような人か」を哲学通信のテーマにした。筆者の講義は、ユーモアが人間愛や心の温かさから生まれること、ユーモアは厳しい現実社会を生きていくうえで心の余裕をもたせるという点でも大切であることを解説する内容だった。

ユーモアという概念に信念のような心の強さを感じている学生たちの声を以下に紹介する。人生の困難に出会ったり失敗したりしても、それにめげずに前進する強さをユーモアという言葉から感じ取っていることがわかる。ユーモアのある人とは、逆境をプラス思考で捉えてチャレンジする前向きさをもっている人、つまり逆境の辛い側面だけを見てそれにとられるのではなく、逆境を別の角度から捉え行動できる人である。

「ユーモアのある人とない人の決定的な違いは、出来事に対する感じ方、受け取り方が大きく異なることだと考える。ピンチの場面や、何か失敗をしてしまったときに、悲観的になるのではなく、為せば成ると考え、笑ってられる人は、ユーモアのある人だろう。逆に、ユーモアのない人は、常に何かに追われて焦っているような印象を受ける。『もうダメだ』『ど

うせ無理』『自分なんか』『こんなこともできないのか』など、悲観的に考えてしまう人は、ユーモアのない人だろう。」

「私は、ユーモアのある人とは、精神力が強くていつでも心に余裕がある人だと思います。普通の人には窮地に立たされた際、自己維持のために笑おうとしたり、他人を笑わせようとは思いません。しかし、窮地に立たされていても、精神力の強い人ならばそれができると思います。また、心に余裕のある人ならその際に冗談も言えると思います。なので私は、ユーモアのある人は精神力が強くて心に余裕のある人だと思います。」

「ユーモアのある人とは人生を余裕を持って生きている人だと思う。失敗を恐れず、失敗しても笑い飛ばすくらいの余裕を持っている。そして、周りの人間も笑顔に変えてしまえる。余裕を持っているのでいつでもボケたり冗談を言えたりして周りの人間を笑わせることができるのだと思う。」

相手に対する思いやりを持ち、相手の立場に立てる視点がユーモアには必要である。ユーモアのある人は、相手に対する配慮を忘れず、相手を受入れる受容性と相手を元気づける人間愛に満ちた人であることを指摘しているのが以下の文章である。

「私はユーモアのある人とは、方法はどうであれ、他人の気持ちを良い方向に変えることができる人だと思います。そのためにも今相手がどのような気持ちでいるかを正しく察知する感受性も豊かでないといけません。そして、その相手の気持ちをプラスに変えようという優しさ、それを実行する行動力が必要であると私は考えます。」

「ユーモアのある人とは人の気持ちを考えられる人だと思う。相手が悲しんでいるときに笑わせて欲しい人もいれば、そのままにして欲しい人もいる。ただいつも笑わせれば良いと思ってる人はユーモアのある人だと思わない。」

場の空気を読む、読まないについては、以下のような穿った意見もあった。

「ユーモアのある人とは周りの空気を読まない人であると思う。この場合の空気を読まない人とは、周りがどんな状況で他の人がどんなことを思っているかを理解した上で、あえて空気を読まない人である。どんなに緊迫した状態でどんなに周りに疎まれていよう“にもかかわらず”その人は惚(ぼ)けて笑うのだ。人を笑わせるのだ。その人こそユーモアのある人と言えよう。」

ユーモアは、広い視野から物事を捉えられ、狭い視野の考えに揺さぶりをかける。真面目すぎているは気づかない、柔軟で独特な発想がユーモアには求められるとするのが以下の文章である。

「ユーモアのある人とは頭の回転が早くて想像力のある人ではないかと思う。常に場を軽くしよう、楽しくしようと考えていてわざと面白い事を言ってるのではないか。しかも、人と同じ見方だけをするのではなく、普通の人の方があまり考えつかないような発想を持っていて、それを言葉で巧みに表現している。これは頭の回転が良くて想像力が豊かな人でないと難しいだろう。」

「私の考えるユーモアのある人は、人と違う発想で周りの人を笑顔にできる人だと思います。人と同じ発想だと笑いをとることが出来たととしても、その笑いは一時的な笑いでもいいと思うが、人と違う発想だとその場の笑いだけでなく後になって思い出して笑うことができるからです。」

「ユーモアのある人は1つのものを多くの視点から見て考えることができ、頭の回転が早い人だと考える。普通の人は何も思わない物でもユーモアのある人はそれをどう面白く捉えることができるかをすぐ考え、それを利用して笑いを生み出すことができると思う。また、大阪のノリツッコミのように急なボケにも動じず、出された物で会話をどう続けられるかを一瞬で理解するのは多くの視点で考えて、発想する力がないとなかなか出来ないと思う。」

ユーモアのある人は人生を楽しむ意志をもった、一種の楽観主義を生きている人と見ることもできる。哲学者アランが言うように、悲観主義の気分で生きるのではなく、人生を楽しむ意志を持ち続けようとする楽観主義を己の信条とする人である。(12)

「私が思うユーモアのある人とは少しのことで神経質にならず、いつも楽観的で笑っている人だと思います。また、隣にいて楽でいられたり、笑っていることができる人だと思います。なぜなら悲観的な人やすぐ神経質になる人は一緒にいても気を使ってしまったり気まずくなると思うからです。」

「ユーモアのある人とは、窮地においても余裕を見せることのできる人だと思います。現実が見えていないわけではなく、余裕のもてない状況に自分が置かれていることを分かっている“にもかかわらず”ジョークを飛ばすなどの余裕があるかのような態度をとるユーモアのある人は、普段から他人と同じ経験をしても他人以上に楽しみを感じられる人だと思います。」

講義ではユーモアという語は、英語のhumor から来ており、humor という原語に含まれる多様な意味を包含する日本語の訳語がないこと、ユーモアという概念には、人格・生活態度・人生観・世界観といった人間の生き方そのものの意味も含まれていることを指摘する。そのため、ユーモアのある人とは、わざとらしく笑いをとろうとする人ではなく、人柄からにじみでてくるような自然なおかしみを感じさせる人であるという意見もあった。

「人を笑わす力を持っている人だと思います。でも一つ条件があります。笑わそうと頑張るのではなく、無意識に笑わせていることです。ユーモアのある人は、他人を笑わせ幸せにしてしまう。それを見て自分も釣り笑いし、幸せを感じる。ユーモアのある人の力はすごいです。私もユーモアのある人になりたいです。」

受講生たちは毎回の授業の開始時に、他の学生たちが書いたこのような「哲学通信」を読み、互いに知的刺激を与え合っているのである。

#### 4. 授業評価アンケートの結果より

最後に、筆者が担当した「哲学の基礎」に対する平成28年度と27年度の学生の授業評価アンケートの結果を紹介する。結果は15回の授業全体に対する評価であり、そのうち3回の笑いの授業だけに対する評価ではないが、参考までに筆者が当初掲げた授業目標に関する数値結果を以下に示す。評価は5段階評価（5点満点）で、数値が高いほど高評価であることを示す。回答数は75名であった。なお、( )内は平成27年度の数値で、回答者数は65名。

「筋道立てて考える習慣をつける」については4.1 (4.0)、「なぜ～か、～とは何かという疑問を大切にする」については4.3 (4.3)、「自分の考えを自分に明らかにする」については4.2 (4.2)。

また、授業で用いた教材や手法で良かったと思うものを以下の5つの選択肢から選ぶ質問（複数回答可）では、「プリント」45人 (60%)、「DVD」43人 (57%)、「パワーポイント」26人 (35%)、

「哲学通信」22人(29%)、「板書」18人(24%)。

ちなみに平成27年度の回答は「DVD」48人(74%)、「プリント」45人(69%)、「哲学通信」36人(55%)、「パワーポイント」24人(37%)、「板書」21人(32%)であった。

以上のように「プリント」については毎年好評価であるが、毎回授業開始時に配付するプリントには「哲学通信」と授業内容のレジュメとがあり、どちらに対する評価であるかが判然としないので、平成29年度以降のアンケートでは、この点を改善したい。

なお自由記述欄で、特に「哲学通信」について書かれた意見では、「哲学通信によって自分の考えをまとめることができた」という意見が毎年多数見られた。

一方で、「哲学通信」は受講生にとって毎回送付しなければならないため、提出を忘れてしまった学生にとっては、目標未達成という感想を残したようである。毎回の課題の送付が、受講者にとって過度な負担にならないように配慮しながら今後も続けていきたいと筆者は考えている。

## 注

(1) 今日本の教育の現場では、何らかのかたちでアクティブラーニングを取り入れることが求められている。アクティブラーニングとは、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と定義されている。

(2012年中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」)

「哲学通信」は、学生の多様な意見を相互に紹介することを目的に筆者が実施し始めた試みである。

(2) プラトンの『クリトン』では、ソクラテスの言葉として「一番大切なことは、単に生きることそのことでなくて、善く生きることである」と伝えられている。プラトン著、久保勉訳『ソクラテスの弁明・クリトン』岩波文庫、p. 74。

(3) J. モリオール著、森下伸也訳『ユーモア社会をもとめて』新曜社、p. 167。

(4) 笑いの理論については、井上宏『笑い学のすすめ』世界思想社、井上宏ほか『笑いの研究』フォーユー、を参照した。

(5) 日本人の笑いについては、山本明ほか『日本人の笑い』誠文堂新光社を参照した。

(6) 大阪の笑いについては、井上宏『大阪の文化と笑い』関西大学出版部を参照した。

(7) アルフォンス・デーケン『よく生き、よく笑い、よき死と出会う』新潮社。

(8) 矢野峰人『英文学の特性』松柏社、p. 94。ただし旧字体は適宜、新字体に変えてある。

(9) 人を救うユーモアについては、織田正吉『笑いとはユーモア』ちくま文庫、を参照のこと。

(10) 「哲学通信」の内容と表現に関しては、作成された文章の主旨を変えない範囲で文体や助詞の改変と省略を適宜行っている。

(11) 『富山国際大学紀要』2015年3月号、現代社会学部第7巻所収「富山県民の笑いに対する意識調査」。

(12) アランの『幸福論』には次の言葉がある。「悲観主義は気分によるものであり、楽観主義は意志によるものである。」アラン著、神谷幹夫訳『幸福論』、岩波文庫、p. 314。